行路
京極南行　土御門西行　冨小路小行
中御門西行　東洞院東行　一条西行
室町小行

行列
先新院殿上人　次同こ䇿　次御随身
次御車　次御傍官人　次姫大夫上人
次同こ䇿　次御車　次傍官人　次下
少納　次女車

右新院姫宮御行始記雖有誤字依無類本不能挍合

北山院御入内記
むかしより國母女院あまたわたらせ給ふ中にも
いとやむことなきためしにやあひ侍しは東三條(詮子)
院上東門院(彰子)待賢門院(璋子)大宮院(姞子)なとの御事にや
かきてはみな女御后よりあかりて御ありし猶
ひとかたにはなりてちかき世には廣義門院(寧子)そ
院の女御まて后にはそなはらて猶たゝし花園院(九十四)
の御位の時後伏見院(九十二)はたちのうちなからの門にすゑて
らへりされ諒闇なるとしなかりしそかしさるは
女院にも永福門院(鏱子)のちかきは例なきまれなるにや

かゝるく御養母にて度々の入内なりしはめつらしや
らむ後にも光厳院（九十六）光明院（九十七）二代の國母にさへなりませ
給ひみしはかつらしきをめしおかる文陽禄門院（秀子）はうちの光
厳院（九十九）の御母にてかはらせ給ひしかとも
徽安門院（壽子）の御子のおはしませはなかりしさまにもおちゐ
くおはしまけるにこはのめる御例ありしを梅も北山院（康子）はそのかの
まゐらに後小松の國母にさためおかされてありしは二位
にてかくおほせたふかと三宮にはかくてそおほせらるにおはりて
御封くさるまとくならしのらんへしとやなとさる事
中さるおもふまの年もあらぬかなふぬまては引のためつる

しき春の光をそへおはしまさりかしとにはつかの入内
あるへしなとさためはかれるにかしてあるはしくいはく度々は
の御例にならせて先院号ありて御葉いしめのさ
しきとてもとのへらすんはしあるへくとそ関白（経嗣）殿と
申されしかとこの月五日かんなる亀ありまいま
いりてちんとしてさためかしまる花山院大納言（忠定）日野
新大納言（資藤）藤中納言（資家）へんなど寺の中納言（経豊）かん宰相（秀長）
左大弁の宰相（豊房）なとそのく例のことくまつ門のまへ
とものとひとつめる門つきよしやて御在所のこうは
すなるるよしかくへきさらし奉行右少弁家俊すは

こさて一周に養せらる関白か孫てあいきん京よは
拾ひてすそこおきる職事御上ての古ふて人々乃さ
きめこと案をつゝへすて須ニ与養せさせて御さいハ所共ん
事くんさに拘らせて北山院とすへさいすし作ハさき
ろ関白まうる此子細をト知し拾職事ちんに出て次
すり乃おもくも宣下すまじけ官外記宣旨をなして
女院の御所へことらて来る院司乃公卿殿上人もある
しく拘いりて境中めきつたんあるとさを作かりし此
院司の折紙もつさく勅書を添らるいさと、かゝゐし七年
すさこともふしそ文治にてありし殷富門院（亮子）

あんうる此時後白河院（七十七）御年法ろうしいつそくされしき
やうの例にもあらてらふ毎てさいや判官代なとは
例のこく陣にるく宣下何つもなるとをうけ給ろし
さて御入内ハ弥生の廿日あるり三日乃事なりつさ
のよ乃雨風もふおりなく曇らぬこそ此々しきう
らゝにて鳥乃声も心地よけなるにけ乃梅花乃ふ
つさかり志らかれま咲みて匂ひて玉かを志ぬらおり
へ乃庭みともろおかくみうき拾へる上達部殿上人
まつ此乃御所へまいりあつまりそ侍中さるか孫て
まうかやう此御まさめこ河まじハなりこ此御所ハけさとく

より南乃御所へよらせ給ひてよ給つ御覧つかうまつるらう
あはれなりしまほいとおかしかりとめて御紀御事よ
おほやうしくるましく車どもよせ侍るなときこゆ
しかも関白殿をもしめさる南の御所へまいり給ふ
我たてらしと色たとおかしくあれハてそうもとし随身乃も
かまつりしみなおや孫あぬこさよせくそぬひりの御
ありよふれとめでたうつかうまつり関白殿ハやうやう
うちやうし給へハそれ乃上達部ハ左乃あしおとしめ（堂上）
て中さんの御ふしかきふてかむてさに一ま門よ立給ふ
女院乃御車たち給て南面の庭ふうてらつゑきしの（諸司）

二婦人とかや主達をひきさてくひさきしちにたゝく御所
乃れ志やうぞくいとるかこさし紀るとハ常けまもしとや
三ゝんの御せちを給ありてえさし五ゝんひらし乃はるとも
なとの見るてにゐゝくて四人のきちやうをぬてゝれ常
の公卿乃座をは女房たちぬしよ所におきさるか御す
乃うらたきぬのたとてるひさやうふけるてゆへくるえひ
うせ花れ南ひもあたとされそうゝ、あし車をもいまさゝ
のはうとよりれつきて志あいふ門乃とにおそてなるふ一
乃車ハうらを婦るも孫のひむかしれ給ふにかせ殿上人
ともたちりてきぬ乃袖をあふさるを引はくろふなる

よしありてみなその後かうしひきしの御車をとかく
しかまふよせらる院司どもちやうくちんなとゝひとゝ
もとむ少将隆さねかきさゑもんのすけなかこれうちかく
ゐてこたへかゝさてまいるへしくいつきとも院しおもわん 陰
陽 さやうし三位ありしなる集にそてみとてのうちみなくへん
師 まいあるかとゆりやにおとゝの御屏風をかそへてそのうち
かんゐせいおもしろしてうや番んとくもそゝあんみやうし
次て後関白殿日野の大納言 重光 殿二人御車よせにまいる
おふ東の方ハ関白殿西の方ハ日野の大納言殿おなる
しくゐやうし一本丁をたてゝしそきなかへいやうて御車に

めさるれおりのゝちハ法大寺の右大臣かくの御女
おなりまいるもくハりきハ院の御入内ありしかの御家より御
ゆるせおはしまいれいまや御車よせの事もかいなくてよろ
さきあらしてなかしれ入内文そまいるよりさき大宮院の御入
内かし摂政関白まいりおはしかふなれはまいらせ給しに
一とうハ大臣ありしハ大納言なりしかせおかりてまいるへきこ
のつといひならふ事なまいる此一せとひしもそのかたよりまいりて
し御車よせれなくいてゝ関白殿ハさきの出てなる
まいりにとゝ道より内裏へまいりおはせ給ひしも御車
よせの人ゝせん例もみなかのかくに侍るとかやきそても

これもしたしたかうしの東のつらに五間はかりにてまうけたり
くまんまてハ宗清入道うけ給はりていとめてたくうつくし
めかしてまつりいまゐらせ我も出仕のあとへまゐるみちのさ
まうおもしろそこにてつかうまつりゆうよかうらうぬるはんしやうまて
そうちゆう者と申まてもめてたき見物にて我もありし
此れ儀式ハいつもせ給はんとて八えふの車を中門のから
のところにふよせられてめさるゝかと立あるひなさる
上達部皆ひきつゝきて参る御車やうやう出して後に関白
殿も出させ給ひて女院の御車やうやう門のほとへいたさる
程もなくさしくる挑灯とさしてみちみちの目も入かはれるほと

もとはつきそておつるかうえんあるにそくまんれうらま
なくつゝもえゐる車ともは君のとまる袖くち裳の
すそはかきことなる物の色はいときよらにつまくれて見まへ
むらさきしかるに人まへひのまへゐしもの絵描かはい
のすゑの御まへもつとまいつゝいそき内裏へ参り
ありんとて出侍りしは入道みなこそまゐりつゝまうけよふある
忠くて後に人々もまつりをひて我はいそきか奥に参りて門
前侍る程まゐりしかともせられめいともあるはめてたく見えて
てみせかたちのあさましきみえまへはおもしろくはつかしさへて
ひて昼よりも程あらく侍りけるとそさきのさし

き物見車なともかはらてよろつ所ひしめくの大
路一條わたりは所なくひしくつまさへ満くさしさへ出
車ハ内裏の東の陣よりまいらせたまふとてはるかく
おかてなとはやうしむしこみて道もさりあへぬは西の
陣よりまゐりてつかひ侍るは中々人もなくおふて例
乃宮下なとれ車もあまためるいや上くろくもと
もそむやうしの庭にかやかに給ひさて侍る程ふハまき
れきうしさたまるにつられぬこなかなかなる車まなく
侍まてしけれ入内ハかやうに衛門の陣又ハ北の陣れと
よりある車なれハ村ふよろすゝる大やきこその方ひ

今さしわたし給ひて侍る殿上のかくよりめのかたまて
とのもしはうきなる年ハかへりみしよろしき侍まてしなく
殿上人みなかくわかうもたちて給ふをかへや御まゐらせ
中殿へしたゝかしまゐりたまひ殿よりまかて御車よせの
みをとめおそさせにまゐりあかりて侍りしきまさに
やとなハそゝろなきさまのさまにへハ中くしき人のし
わたくしとて小山殿の女房達なかめらかにみたれとえて
くちせ給ひて廿人ばかりハ女しき車十まてやうかく
まゐりあへる柳桜たちさまとそれ緒の色あひ
もしきなる表乃御しる見てこそ出まいるに立満してと

ゆるしたる花のかさしのと山ぶきなるへしといひしは例の
こさぬふるさは獨しるして侍らぬはさやかなる
雲井の夜なきは我らか立満されても見侍へる
とそ上戸なとさそひこまへとくまいらしく物をお
なるゝ枝も常かな涙し心侍しても見そ我花
人なるとよお出ばかりてひ待まいらせ侍る冬
さし乱して東の小路所のわか人立引ありて出され
さして年は立なまして百夜のうちもとせの
なりいおとふしろまもしく志侍らうも亀人とも此志し
少らわかりてんかやきしみさうそく此中にわか侍つ

なくてそのとのさ侍しいかしきらしたる事なき
ともに此所の設んかしもしさるたんさしつらひに
こなり中四間そ御座いまんの所なるへきさまなる小そ
梅て東むしさにうけん（繧繝）れてるのかくふかとしきるり
こまんの御志と稱なりしさて御座とす畳此前り
此なのるよ唐よりほのきと称とし代て女院の
此庭とんをおかなとらへのるふさとみをきなみてられつら
そのうらに三尺此所の木丁をなれそらは見えてつ
きんのさとめ女院の御所へ行幸なる時此木丁をて
爲さくて御対面のあるなりきやうれさうめしふなるは

らへまうでありけるにや保元のころ美福門院より
行幸のおりさたありて東の御所のせうちむ
やう〳〵ちかつさ給てせうえしほとに給ての所
のうゑ右少辨はへしまゐりてもよかりしとて
のへころせんくれ上達部殿上人次第に門のうちに
入てかんあらへて南の方に西を上にて北しきにする
ひさし殿上人ところ松明をとりてさきにまゐる
みかし車をは寄てかくにしてなと人なか
ぬしくは御りの儀にそ奉して延慶の例とかや云々
御車を門より引入て車しきれつゝとのまへにまゐれ

とし関白殿日野大納言殿又屏風木丁をとりてまゐる
うちいたされしとこよの役人ともおほくよらず三位殿御
局をさゝぬにかくりの板てより御車よせにさふらふ
おりて御またせおはしまして入おはしまつりをかへいやりて行
幸なる御かくいたさけるなそしすゝしの御ともなる
藏人ともまそくをさし中将さんよりのたかそんしの
御されの御くんをとりて御やう紀にまいり御前を渡殿をと
ゐそさせおはしましておかいしより南殿の北のす
のこを東へおとりて小御所の南もしきれ西の妻戸より
いらせおはしませは関白殿御あとてをとこきをかへ小山

殿もうらしく御子のあまたおくよ後清さるへきにや
うれしと思ひ申させ給ふもしぬきはなくいぬ事
なりとも見てなくそかはえ給ふ御対面もそ
本殿ありくるんとよする女院も又わかへりたる御
事よせなとれ申しもさ給ふ事ありしを御のこさ
あさいつみやうて常ふ給しかもくるしこらとれ御ことも
みたいりせ孫ハ残りかたきを心地しあるさてとも院司
のうんしあり御なくつも物なとよふあるまかしさる
なるに天治元年とかや待賢門院御入内より
あつらしう御かまへいとえんさやうにもさる所つ
（延慶）

ましハかし殿上ひしき申つの御さるハなきさにてさ
まいらせ給ふ御くうりのいりうハ御座まいらさせ孫とも
何とうや右あるなれ随意を職事ハへとし勅使り
てあくは日うちてまいるとそはえしくらふの始まさまり
乃院司ハ右大辨とまさ門乃綱かなる但そまいハそて
大かたハはうふうる日は大納言殿そよ後清とう
とうちて出いとめ人なくや御ゆうし後ふハかめしく
ありかあさま事よ我みるかやあひ侍る御よろこひハ関
白殿法くつきの御心せらるとかや御道乃ほと
人とのかうさうなとさらめて家くの日記ても

しろしきさき侍らんされともさ紀にや侍るあやし
ものかつちさまへよろしさ孫呉てものしかさね
まゐ侍るなり身を奉るなまへと哉もしくと思ひのと
おこたりふ中にも日野大納言殿かうこさとのやにて
此事ちろくうるまとうるさる馬くさりてかさりを
ころ乃へ天のまゐりくうさ急ともれのえたさ入りけ給
へましもん御まひりんおとは限あるさりにて志より
木のさうしさぶらしくもくてあつうをいひあら
又ことおいしの別當兼宣はろとも第一とやおもひそ
ある事やらくはりつさ哉らしまさゆむるうち給へは

此御かたはしたにも多く語られ見物にてありしと
人の語り侍し公卿殿上人のせんくなどは馬うち
むれ下らずとき紀にてそをはかる所にも

近衛殿 良嗣
左大臣
随身ちやうにて左右の番長二人馬そのかたらかの随身六人二人は冬ちとら一人は菊を持て馬のうしろにありこ称りいろひたへと称り二人如木のさうしき二人ひたへのさうしひ二人

今出川殿 公行
右大臣
さふらひ一人志らあをのあやのかりきぬ花を付くるそく八人と称りいろひたへと称り二人志よ木二人

徳大寺殿 公俊
左大将
番長かんしやのかち花を付くかららの随身五人もうしろさやのからすかりの花の柄乃まうまもたたく馬そへ六人と称りいろひたへと称り二人志よ木二人小さうしき六人

西園寺大納言 実永
馬そへ六人と称りいろひたへと称り二人志よ木二人
小雑色六人さふらひ二人

ごう院乃大納言 實信
馬そへ六人と称りし二人志よ木二人小雑色
四人

花山院大納言 忠定 さふらひ白あをのうきぬ袴かつく馬そへ六人と称
り二人志よ木二人番らう六人さうしき二人

日野新大納言 馬そへ六人とねり二人如木二人小雑色侍一人 イ无

別當 くちゆう四人かとの狩さ六人りん随身四人いつひ馬副のと称
ふかうりやうすにかうてめしくせてうそへとねり二人志よ木
小雑色二人

よみかへ中納言 隆敦 馬そへ六人とねり二人志よ木二人
小雑色四人

今出川中納言 実冨 馬そへ四人いつひとねりそへとねり二人
志よかく二人小雑色四人

冷泉中納言 為尹 馬そへ四人いつひとねりそへとねり二人
志よかく二人小雑色四人

中院中納言 通守 おなし〳〵志よ木一人

北畠中納言 俊康 むまそへもおなし〳〵志よ木四人

九条殿 中納言中将 満教 さふらひさあやめうさぬほうんのぬきあわ小随身二人
馬そへ四人そへとねり二人とねりいつひもんよう

藤中納言 資家 馬そへ四人とねり二人志よ木二人小雑色四人

くゑんちう寺の中納言 おなし〳〵志よ木四人

世尊寺 侍従宰相 行俊 おなしくそうし志よ木二人

四條宰相 隆信 おなし

四條新宰相 隆直 おなし

中山宰相 満親 おなし但小雑色六人

三條宰相中将 公雅 おなし但随身四人侍一人

万里小路 左大辨宰相 満冬 同し但志よかく四人

いまの小路宰相中将 さふらひ二人随身四人馬そへ四人いつひとねり
そへとねり二人志よほく二人せんとう四人

嚴上人
そのうち ゆかりさき朝臣 随身四人とねり二人志よ木一人
おなしくうら八一人小さうしき四人

持明院中将
ゆふはえの朝顔　おもし　但志よ本なし

少納言
あさとちの朝顔　志と祢り二人少納言侍一人志よ本一人小雑色一人

志ころへ宗の中将
さ祢あき比朝ト　随身三人と祢り二人こさうしき三人

右大弁
ゆちよさ川乃鶴顔　と祢り二人弁侍一人志よおく二人
同しきつハ一人こさうしき四人

かうしや寺の中将
ちりの乃比朝顔　随身三人と祢り二人如木一人小雑色二人

少納言
あかまその朝顔　こ祢り二人志よほく一人こさうしき四人

左弁
ゆふかさ比朝顔　と祢り二人志よおく二人雑色四人

三条中将
さんよりの朝ト　随身四人小と祢り二人しよ本ゆかしき
つハ一人さうしき四人

さきの治部卿
附なりの朝顔　い祢り二人雑色四人

その中将
すけあき比朝顔　随身四人と祢り二人志よ本一人かうしき
つハ一人こさうしき四人

前宮内卿
いつもあき比朝顔　と祢り二人志よ本一人こさうしき四人

ちくさの中将
あさ河乃朝顔　随身三人と祢り二人こさうしき三人

二条中将
ましをあいの朝顔　随身三人と祢り一人こさうしき三人

月の輪の中将
あさ野への朝顔　随身四人小祢り二人志よ本比うハ一人雑色四人

おほきまちの中将
さ祢さて比朝顔　同しく四人と祢り二人志よ本一人おもしきつハ
一人こさうしき四人

蔵人右少弁
いへゆし　と祢り二人如木一人雑色四人

くら人の権の介
きよあき　こ祢り二人こさうしき二人

としあき中将
さ祢きと　随身二人と祢り一人如木二人同さうハ一人雑色四人

あすか井の中将
あきこさよ　随身二人と祢り二人如木一人同さうし一人雑色四人

ふやしゐのとけ
ともあき　随身一人と祢り一人如木一人同さうハ一人雑色四人

山しなのかね
のりたゝ　随身二人とねり二人雑色四人

左のすけ
すきかぬ　くいちやう二人かさのもちさ四人随身二人とねり二人
如木二人めすしさつかいは一人さふらひ一人

山しなの少将
のりとよ　随身二人とねり二人雑色四人さふらひ二人

きなりんのすけ
すけちか川　随身二人とねり二人如木二人同さふらひは二人雑色四人

侍従
まさちかこ清　ことねり二人如木一人同さふらひは一人雑色四人

山しなの少将
みちよし　随身二人とねり二人雑色四人

大内記
あつのより　とねり二人さしき四人

宮内大輔
ゆきみ川　とねり二人如木二人同さふらひは一人雑色一人（一イ）
さふらひ一人

ゑもんのすけ
つね秋さ　随身二人とねり二人如木二人同さふらひは一人
さしき四人さふらひ二人

ひやうゑのすけ
付かねさ　まい身二人とねり二人ゑもんかく二人同さふらひも一人
さしき四人さふらひ二人

さひやうゑのすけ
いうしやう　随身二人舎人二人如木二人同さふらひは二人（一イ）雑色四人

なか井の侍従
あきとよ　とねり二人さしき五人

四辻の侍従
まさゑいつし　とねり二人さしき四人

くら人のとうさ
すけ清さ　随身二人舎人一人さしき二人

くら人のしゆうゑ
のりまさ　随身二人とねり一人さふらひ二人

已上公卿殿上人せんく也

御くるまかうひさし

まへのかたはい二人ちゆうくゑん八人かのえふけく
御車そひ八人かちかよりかりしのいひ（からかさくもきぬきんらんの袖ひとく）
ゆゝちらかさも川はかまいのふれ御牛かひ二人うしの

ちやうちんは仕丁あまりかさもちもつけのめ
しつき六人せうめいまとよろしく御車の前にあり
たうこさ日野大納言
さふらひ四人馬そへ六人御馬屋と称すいのひける
をもちてかまふたちてめしくせらる下ニ木八人
ぞくと称す二人
めしつぎの輩さぶらひの装束は
志ろきあやのかりきぬをつくさしぬきなれさみ
きんらんの袖かくし石のおびをさす事なれども
亀いまい

此後乃ちうん人大夫の判官乃御ひきさかへこ
くちもちの二人かくの輩と四人と称す口とりはなし
其下部十人そう川之けろのおもてにそらう下記
すまいれはとくし氏馬うちにおつく所と侍
らさひあるあるまとくし装らひいかなう
あり文永中もん後嵯峨院法皇の御うめは
此さしあるおし車や
この後にめし車 むまやう 十二年やや其ちあらう
車そへ二人うしかひ一人みな志かま本そくさし
さひ人すらいの仕丁なとおつまし木わし

忍ぶのさぬしひ一人つきくゐいみて一ゐり
のつきみめともにあり
女房のさぬとし多めとも物のしく後みてゐ
つ糸て志つし侍るまい女院のはそそふハく
まきお井れうまやう十志ろつさ物むとくちし
後さかつたり物の御うち見（こんさうかつくてか　糸をまねくなるか）
あたちのさんらんの物ちつちき（こん葉くそてまさ　てうおし）
ちくまたなゐれかつみしこの物しくさめく（こんを　くろま）
うら明ちちろのさんしやのれ毛（物ひき紗くるん　まあゐ　まかつなり物ハ絲のこし）
れ志つしかつさぬ物みつし（をさき物さう　かゝくさ）人またな

のみ浅うらつさぬ物ゐし物よりたちの袖志う
の女房ハ志ろきさ七つきぬ（こんかめ　のうし）物おし紅とく
こうちんのうちきさいのきぬれかうハさぬ（うすを　をな）以
も浅糸のくし（紅くの　紗き）表よしかうきぬ物おし
志見うらさかつ物おしもうまちの（そのまき　御車）
のうし後のかつさより後さく紅物ハゐしら
ま十あ二人はら乃里後みせ
一の車（西園寺の大納言　まのりせうる）比ともとく忍もんのせいみ川やまと
上らう（おなさ町の故大納言　そうきもの御むすめ）
うへハ（加）逆の梅の五绡あをきさとく山吹の

うちきハ何か色のかくさぬちまりの花あかき
のこしく重ぬ紫井ぬうらこきぬかさねしたるハ
かりゟ

西乃対ハかゝみ　旧院の大納言のめのむすめ

志ろきこきこきぬかさね紅梅乃うちき
おとんかめひしあをいろのかくさぬもあか色のこうしき
うちきぬかさねしたりかさね陵

二乃東　日野大納言まいらせ給
桜もしあさのちたる尉みかとき

東の対ハ　小小路故大納言まけとしの対むすめ

うへ志ろきこき梅乃五こきぬすそひとへもくさの

うちきハあさ花乃かくさぬもあか色れ立し
重ぬ紫井のうちこきぬかさねしたるま
きんの対のる　きぬくらけの故一位たらさしのめむすめ
色くの五節重ぬるかた乃紅へあをいろの
こき何か色れかくさぬもあか色のこうし重ね
紫かた乃うちこきぬかさねしたりける

三乃くろま　花山院大納言まいらせ給
桜もしも海しさ尽とん尉ゝ門ひろ

二條との対　くらん志ゝ寺の故大納言法師むすめ

むらさき白ひ乃五こきぬ重ね紫井の立とへ柳
乃うちきあか色れのかくさぬもあか色の立し

くまなき井のうらこきぬ袖すりなくらいりま

権大納言殿 中山乃さい志やうのむすめ

志ろきに白絹袖すりに給く紅梅乃うすくこきある

色せぬ紅にこきぬ裳ある並の六しくまなき

井乃うらこきぬ袖すりなしくまなる歯

四乃くるま 日野新大納言 まいらせらる

新大納言殿 白川乃故三位あきひでのむすめ

めしきしいせさんもん尉さるつ孫

柳乃五衣くまなき袖に公よくこきよまなきれうい

こきあるゑれりしきぬもある色乃志らしくまな

なき井のうら裳ぬ袖すりなるまなる歯

民部卿殿 志まもも志ら川の三位のむすめ

うら歯さらに紅梅乃あつきぬ歯さらすなもきる

こきれうすきいつ色のかしさぬ裳ぬ志らしう

ちこさぬなるまんつまなきも絶ま袖かし

五の車 別當まいらせらる

三条殿 今の入道きうけらのむすめ

これにも伊勢濤門尉よりけか

はなのゑ志しうい乃五絹あをさ公よくもえ

こきれうなきさかしさぬもうらこきぬなるゆきき

しおかし

大宮殿 弘んこの入道としあるのむすめ

やなぎのかさねくれなゐの紅にへさよまさりの
うはぎからぎぬうら紫ぬもちゐたまはし
おなじ

六の車 今出川の中納言まつりせらる 是とし左こじんのせうゆきたけ
小兵衛乃かんの殿 松つ林のむすめ
こうきさねまかひのかさねくまさりなゐ紅梅
のうはぎえび染のからぎぬ萌黄林のにし
えび染のよくしくまさりなみゐうらさぬ紫かし
まりけ唐

新さいしやう殿 これくさうし三位乃道としおりのむすめ

まつ林のかさねくまさりなゐの紫にくへきえん
こきのうへよもゑ乃外よ紅小袖かし
七乃車 冷泉中納言まつりせらる 是とし忠こじんのせうなかね
これ殿 松宮内卿むすめのむすめ
こきさかさねゑひくうは紅かくさぬ
いし紅小同し
少納言殿 もん三位入道為世のむすめ
うら山吹乃かさねあそさ紫にくへきよわらのう
は紅からきぬいしへ表まさりもおなし
八の車 もんまつ寺此大納言此とし左こじんのせうふゆなり

衛門佐殿 西園寺法主
ことひれむすめ

はるしの五こさぬもえくされひとへ松かさ孫乃う
まち乃うら山ふくされのうきさぬおかし志しうち
こさぬたる図されよおかし

兵衛のかん殿 らく大寺の法主
きよもるむすめ

やちさされあさぬ乃まつ多ぬれ日とへえひ深乃
うま乃にとくされりくさぬおうすこしそれ
わおかし

九乃車 三条の宰相の中ね
まつりせうは

はりともわんせん忍(左イ)のんれせくこゆる

いよ殿

花やまつされあさぬあ乃さ錦とへえひ深の
うまの柳のかくさぬうらこさぬそる図されり
おかし

まろま侍殿

紫まれひ乃あさぬ乃まつ有井れひとへくとえま
のうま我菴山吹乃のくさぬそれわかしきまする

同し

十弐車 左大弁宰相
まつりもうる

はしもこや忍ひん乃せうみつ尭け

わい
きぬこさ

もえへこさのりぎみむしさ乃旬なのあいつくめ

国立公文書館
National Archives of Japan

山かつのかきねのくまなる井にひきいれ
たるはうちきぬかすしなりたる
みなきの
くるまたか井のかたさま柳のなかにはえたる深の
うへのきぬ紅の単紅の打衣なり袴抱にて
をはくつもの車なりにしたかへれ
とかくすさぬしてはなりたるにつき
し車のまへのかたすなるあまかりさきて
ぬきは殿上人九人一はんはしあかりてまい
らするしや女房のさぬもかつき側はる

かすし色ぬしかくたてあかりしかはととも
たまいしこえんさかり此清入内よりおほくの
こきぬにぬあかりしかすり此ぬひもかやう
にさらしけくしてたゝみしいそう
孫にやはにぬし一条よそては孫人なりける
たとかくのそうたまかふさぬめかしく
めなぬそうえんさぬひの物見人なりへしと
て遠き國よりも出てきてあやし
の志なるひんぬひしはかたくまそても我
さ現にとれは海としへましく花乃都の

うらは誰かは残るへきなれともおもふまゝ附も書
きまゝは人ごとに物ごひあまたにこゝろをつくし
とめてみ給ふくまつるすくなくあるも猶さ
侍めくこそおかし御代まのかはれば萬歳もみな
ふかくくらきまゝほどよろこびのなき門跡
以千年ねのみこそとめもす万代心に
うかもぬる事なくかしこきにいときなひ
のかしこくなりたまふのなをまし
かきくらきれ給ふ絶てつきて此れへ
内にもあるまじかし今なをむしまゝらへて

後の宮上をとさん人もまた代々の世の
ためしにしも思さ侍へことたえたる
忠いとせ給まり四の春の末侍さき葉
まつらせむめのさゝつかへ侍さきめそひつ
おかえを又ちゝひそれ事もなくなる
ことしおもてにも御覧せる人もあらはある
べきなれとも侍るなれ

右北山院御入内記以村井古巖藏本書写以彰考館御本挍合
畢

日本政府図書

群書類従巻第五百廿八

修理
昭和29年1月
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan